

## 夜 戦

夜の戦は陣所に攻め寄せせるのを夜討ちと云い、城に攻め寄せせるのを夜込みと云い、互いに陣を取って夜出て戦うのを夜軍と云うと世上に言い習わされている。その中で夜討ちと夜軍とは少しばかり異なるが、夜討ちと夜込みとは大した違いはない。

○夜は敵の様子も明確に分からず、足場の良し悪し、旌旗の合図もはっきりと見分け難く、敵味方も定かに判別し難いものであり、万事不都合なるがゆえに、十中八九は夜の戦を好まないのである。そうは云えども、夜討ちは勝ち難き敵に勝つことさえある。しかしながら、統制事項が十分に徹底されていなければ、ただ彼これとひしめくばかりで、戦いくさもやり難いものであると云えよう。これゆえに合図の鳴物、合印、合言葉等をしつかりと覚え込ませよ。先ず夜戦の大主眼として、旌旗の合図が見え難いので、鳴物の合図を厳格に定めなければならない。鳴物の合図とは、東西南北の鳴物を定め教えることである。例えば拍子木を東の鳴物、太鼓を南、貝を西、喇叭を北と定めるように。平素の操練でこれらの事項をよく覚え込ませておき、事に臨んで間違いのないようにせよ。その他、松明たいまつ、花火等、工夫次第で定めること。

○夜戦は部隊の編成を確実なものにせよ。編成が確かでなければ、引き上げるときに敵から紛れ者が付きまよって来ることがある。この紛れ者を防ぐ術は、編成が正確でなければ実行困難である。和田（正氏）楠木正成の一族郎党と楠木の軍勢は夜討ちから帰って、「立すぐり、居すぐり※」ということをやって、敵の紛れ者を発見したことがあるが、部隊編成がきちんとしていれば、立すぐり、居すぐりに及ばずとも、紛れ入れるような隙がないことを理解せよ。

※立すぐり、居すぐり⇨約束された言葉を発し、これに応じて全兵士が同時に立ち、あるいはさっと居敷きすることで、まぎれ込んだ敵を探す方法（口頭に対して行動で応じる合言葉）

○夜戦における部隊編成は、一個組二十五人を幾組みも編成し、各組単位で行動させるのが甚だ便利である。

○夜討ちをしたならば、その攻め入った所から帰らず、脇か裏へ斬り抜けて帰れ。

○夜討ち、夜合戦ともに戦場から一町（約一〇九・一m）程退いて忍備（⇨隠密の備）を一備も二備も出しておくこと。万一味方が敗北して、敵が追って来たならば、我が備の前を敵勢の半分が通過した時、斬りかかって踏み崩せ。その時、引いて来た味方も反転して攻め合い、挟み討ちにするのである。

○夜軍の習わしとして、前鉄砲の音を合図に攻め入るようにせよ。

○夜討ちはどこから攻め入って、どこへ抜けるということを全員に徹底しておくこと。抜けて帰るべき道には、迎え備を出しておく。又、帰ることの無い方向に松明等を少々出して、敵の気を疑わせることもある。

○夜の印しるしは白色を用いよ。胴巻、腰巻、鉢巻、袖印、鞆巻等のどれにしてもよい。

○夜討ちでは声を上げることが禁ずる。もし声を上げる者がいれば即座に斬捨てにせよ。このゆえに、昔は枚ばいを含むと云って、楊枝の大きさの木を各人の口にくわえさせ、あるいは馬の轡くつわを結びつけることがあった。

○夜討ちの習わしとして、敵陣に入ると同時に先ず大将の居所を目がけて斬り込め。その次は敵の馬を切放して騒動にさせ、その次は素早く火を付けて焼いてしまえ。もちろん一箇所に固まって行動せず、組を単位とする十〜二十人ずつ所々で行動せよ。首は切り捨てる。ただし大将の首と思われるものは捨ててはならない。太刀、具足までも分捕って帰れ。さて又、馬を切り放し、火を着けることばかりに皆が気を取られ

ていると、接戦の働きが二の次になってしまふものだ。それゆえに切放し、火付け等の役は戦士以外に三々四人を一組として、五々十組も二十組もできるだけ多く用いよ。そして、これらの者も馬を放し、火を付け終われば、戦士と同じように戦え。

○夜討ちの武装は飛道具を多く用いない。手詰めの戦闘（白兵戦）を第一に心がけよ。

○敵を追い崩したならば、長追いしてはならない。鐘を聞いたならば、全ての戦士が足を止めよ。また、旗や馬印の代りに松明十本を将机に振り立てよ。これを目印にして全軍が一所に集るのである。もちろん陣営を乗っ取っていれば、敵陣に有るところの兵器や諸道具を、手に持てるだけ取ってくるのである。

○柵を嚴重に張り廻らせている所はのしき鋸で土際から引き切り、押し倒して突入せよ。この行動は状況により昼間でも実施する。ただし、昼間には仕寄道具（真竹の束、楯など矢弾を除けて敵に近寄るための道具）を用いよ。

○夜討ちの時、火付け役の者は、乾いた柴・萱等かやを四々五把つかみずつ携行し、陣営の中で火の付け易い場所を見つけて、持参した柴を積み上げて火を付けよ。火を付けるには、火船の条に出てきた燃燒薬を込めた大薄すすきの花火を用いよ。

○夜討ちを実施すべき場合に四つある。敵が到着した夜、終日合戦があった夜、大風や雨雪の夜、敵が吉凶について揉めた夜である。なお、この他にも時に臨んで考察して討つべき場合を計画し、神速に討ちかかれ。

夜討ちに用いるべき器械を左に記す。

○梯子はし、これは堀あるいは長屋等を越すのに用いる。

○大槌おおつち、これは営門等を打破るのに用いる。

○大鋸のしき、これは柵、堀、柱等を引き切るのに用いる。

○熊手並びに大鳶とびくち、これらは乗越しの道具にも用い、あるいは力戦にも用いる。

○柴萱かや、大薄すすきの花火、これらは火付け道具である。

右は夜討ちの大略であるが、さらに創意工夫を加えよ。これ以下は、夜討ちを防ぐための条項を二、三記す。これ又、自分の考えを加えて、防ぐ処置をなせ。

○夜討ちは空隙すきまを討つものである。我に空隙がなければ、どうして夜討ちに遭うことがあるか。さて、我に空隙がないようにするには、第一に物見を十分に用いること。物見が密であれば、敵は寄付くことができない。その次は軍法である。約束事が遵守されており、ひとたび「夜討ち襲来」の合図があったならば、営中ことごとく防御の用意をするように精しく教えておけ。その次は営中の戦士の中から自らは戦わずに松明の役につく者を定めておけ。夜討ちが来たという合図があれば、自分は戦わずに早く松明を灯し、面々の小屋の前、並びに営中の全ての小路を照らして、営中を昼間のようにさせよ。総じて夜討ちは暗闇に乗じて少人数にて接近し、突入するものである。しかるに昼間のように明るければ、決して夜討ちに苦しめられることはないだろう。これらが夜討ちを防ぐ上で特に重要な心がけである。これらのことをよく会得すれば、妄みだりに夜討ちに遭うこともない。これら以外にもさらに創意工夫を加えて防御の術をなせ。将帥たる人は、よくよく頭を使って考察せよ。全て夜討ちは思いがけない大功をもたらすものであるが、斉の田单が燕軍を破ったことや、加藤清正が朝鮮において明の二十万騎を手勢八千で踏み破った程の激しい夜討ちは、類まれな事例である。これらを夜討ちの手本と云ってもよいだろう。